

スリランカ随行記

黒住教日新社編集長 池田 光男

平成十六年十二月二十六日、インドネシアのスマトラ島沖でマグニチュード九・一の大地震が発生し、大津波で



副教主様は日本語と英語で慰霊の祝詞を奏上された(祭員が筆者)

教二百年奉告の集い」に出席していた熊本県・蓮華院誕生寺の川原英照師に師事していたとのことで、有り難いご神縁に副教主様と話が弾んでいた。

その後、副教主様はウイマラ師とご再会。師は突然の訪問に大変驚かれたが、同時に心より喜び、筆者ともども手厚い歓迎をいただいた。同寺院では、恵まれない子供たちに教育や職業訓練を施す等、社会福祉にも力を入れていた。現在ウイマラ師の秘書役はその卒業生で、子供たちの世話をする寮長の役も担っているといい、継続することの大切さと素晴らしさ、ウイマラ師のお心が次代へと受け継がれていることの有り難さを感じた。

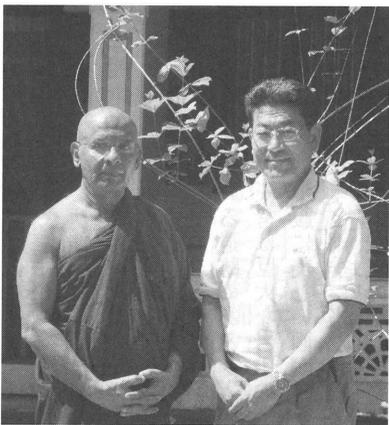
ランムトゥガラ大寺院を出て、世界保健機関(WHO)スリランカ事務所へ。ここの上級コンサルタントをお務めのサラス・サマラゲ氏はAMDAスリランカの代表。氏と合流して「サルボダヤ運動」の本部を訪ねた。この度の慰霊祭はAMDAのGPSPとサルボダヤの共催。GPSPとは、世界平和パートナーシップの略称で、「開か

各地に多大な被害が出た。

国際的医療ボランティアAMDAは、救援活動の一環として大地震一年後に合同慰霊祭を執り行った。被災者には、物的支援だけではなく精神的な支援、祈りが必要であるというAMDAの認識によるもので、副教主様が事務局長をおつとめのRNN(人道援助宗教NGOネットワーク)に参加要請があり、平成十七年十二月二十六日、副教主様はスリランカ・カルムナイで諸宗教者らと共に祈りを捧げられた。(本誌平成十八年二月号参照)

この慰霊祭から十年、あらためて慰霊の祈りをとの要請がAMDAからあり、副教主様は十月二十七日から三十一日まで彼の地へ出張、筆者は随行のおかげをいただいた。

れた相互扶助」を理念に、和平構築や生活・教育支援、健康増進に取り組む総合事業。サルボダヤ運動は、仏教精神を根底に置きつつ、宗教・民族の垣根を越え、教育を通して経済的自立を支援している。スリランカ・コロombo大学で長く公衆衛生を教えていたサマラゲ氏は、同運動創始者A・T・アリアラトネ氏の教え子というご縁にある。翌日の植樹祭また慰霊祭の打ち合わせと場所の下見の途中、アリアラトネ氏のご子息で事務総長をお務めのヴィンヤ・アリアラトネ氏が外出されるところに出くわした。思わぬ再会にヴィ



再会を喜び合って、ウイマラ師と共に

十月二十七日早朝、神道山を出発。新幹線で大阪へ移動し、関西国際空港へ。大阪への途次、素晴らしいお日の出を車中より拝し、旅の安全と慰霊祭の成功をお祈りした。

タイ国を経由しスリランカのバンダラナイケ国際空港で、AMDAインターナショナル事務局長のニティアン・ヴィーラヴァグ氏の出迎えを受けた。ニティアンには滞在中、とても行き届いたお心配りをいただいた。誌面を借りて心よりお礼申し上げます。

二十八日、RNN立ち上げ当初からの海外メンバーであるシーラガマ・ウイマラ師が住職をつとめるランムトゥガラ大寺院を訪問。副教主様は事前にEメールで連絡されたが、師のメールアドレスが変わっていて、連絡が取れないままの訪問となった。同寺院に到着し車を降りた時、一人の日本人尼僧が建物から出て来た。宇塚弘教さんといい、何と十年前の合同慰霊祭の折、スリランカの別の場所で、時を同じくして祈りを捧げていたという。また宇塚師は、昨年十一月十日の「立

ンヤ氏と副教主様は旧交を温め合った。氏は「'97おかやま国際貢献NGOサミット」の折、神道山に滞在し、副教主様とはご昵懇の間柄。

二十九日、サルボダヤ運動本部にてまず植樹祭。植樹はスリランカ政府が推進しているもので、慰霊祭に合わせたの執行は同本部のご配慮。有り難いことに、副教主様の一随行役の筆者も、主賓扱いを受け、副教主様と共に手作りの花の大きな首飾りをいただき、植樹までさせていただいた。

スリランカは近年まで内戦状態にあり、その対立の痛手は現在も残っている。そうした中、同本部ではさまざまな事情・立場の子供たちを集めて教育を通しての和解に努めている。その子供たちと一緒に、副教主様はマングローの木を植えられた。

午前十時を回り、同本部の中心施設である八角形の建物の「ダムサックマデラ」で慰霊祭が始まった。参加者全員が理解できるように、すべてに通訳が付いて式次第が進み、ヴィンヤ氏の挨拶や菅波茂AMDA代表からの

副教主様は生徒たちと共に植樹。右は
ヴィンヤ氏、左はサマラゲ氏



メッセージが披露された。終わって、
仏教やヒンズー教、イスラム教、キリ
スト教の祈りが行われた。

祈りの最後が本教で、スリランカの
タミル語やシンハラ語等、四つの言語
で「平和」と刻された祈りの場所で、
副教主様が慰霊の祝詞のりとを日本語と英語
で奏上、さらに祭典後、副教主様は、
黒住教の祈りについて流暢な英語で説
明された。

A・T・アリヤラトネ氏の挨拶の後、
AMDAスリランカからの感謝の盾を
副教主様ともどもにいただいた。

慰霊祭後、アリヤラトネ氏のご自宅
で昼食会。筆者も、右手だけを使って
カレーを食べる。初体験と、その温か
い雰囲気を楽しませていただいた。

三十日、スリランカ国内の二カ所を
訪れた。一つ目は古代の首都で世界遺
産に登録されている遺跡のあるシーギ
リヤ。かつての王宮は巨大な岩山の上
に築かれ、その中腹に美しい画が描か
れている。ちょうど雨季に当たったス
リランカの蒸し暑い空気の中、王宮跡
までの千二百段もの階段を踏み締め、
その途中で古代の祈りの場所も拝観
し、古代人の暮らしと祈りに思いを馳
せた。二つ目は、セイロンティーの一
大名産地キャンデイの「Tea Fa
ctory」。茶葉を加工する過程を
一つひとつ見学した。

今回一番印象的だったのは、スリラ
ンカの人々の活力にあふれた姿と信仰
心の厚さで、象徴的な出来事があっ
た。三十日金曜日の移動中、ムスリム
(イスラム教徒)の運転手氏は、聖な
る日だからと、車を道路脇に停めて礼

拝のためにモスクに駆け込んでいった
のだ。そして、彼の地ではそれが当然
のことと受け止められていることに、
宗教の共生を見た思いがした。

長期の内戦で苦しんだスリランカ。
平和の維持や経済発展、貧困の解消
等、時間が必要だと思う。しかし、A
MDAはじめ、ウイマラ師やサルボダ
ヤの皆様の継続した取り組みは着実に
成果を挙げていたし、特にランムトゥ
ガラ大寺院の子供たちの笑顔はとても
美しく、心が洗われた。事実、全体的
に良い方向に向かっていると感じられ
たし、またそうなってほしいと心から
願い祈るものである。

そして、この度こうした体験、祈り
ができたのも、お世話になった皆様と
本教との二十年以上にわたるご神縁が
あってこそこのことであり、その結実の
一つと言える。貴重な機会をいただき、
あらためてそのことを感じた。植樹し
たマンゴーの木々が実を結ぶ頃、再び
こうしたご神縁の結ばれるであろうこ
とを思い、継続した支援と繋つながりは大
切にすることの大事を伝えたい。